

令和6年度 《学校経営計画》

名張市立箕曲小学校

赤目中学校区教育目標 一人ひとりが生き生きと輝く児童・生徒の育成

めざす児童・生徒像 なかまと繋がりあって、学ぶ楽しさや自己有用感を育むことができる児童・生徒

1 学校教育目標

自ら学び、人間性豊かな、たくましい 箕曲の子

2 めざす学校像、児童・生徒像、教職員像、保護者・地域像

○学校像	○ 明日も来たいと思う魅力ある学校 ○ 希望に満ちた、同僚性のある学校 ○ 保護者・地域から信頼され、保護者・地域と協働する学校
○児童・生徒像	○ すすんで学ぶ子 ○ やさしい子 ○ たくましい子
○教職員像	○ 子ども理解を深め、温かみと厳しさをもった指導力のある教職員 ○ 互いに研鑽し合い、授業力の向上に取り組む教職員 ○ 教職員どうし、保護者・地域とつながりあう教職員
○保護者・地域像	○ 学校・地域とつながり、「共育」を進める保護者 ○ 学校・保護者とつながり、「郷育」を進める地域

3 学校の現状

○児童は全体的に素直で、活動や行事等に協力して取り組むことができる。その反面、自分のことが中心で他者に思いを馳せることができない児童や、表現力に課題の見られる児童が多い。休憩時間には学年・男女問わず活動する姿が見られる。

○学ぶ楽しさを実感できる授業づくり、基礎・基本の定着に向けた研究実践、相手を意識して話したり書いたりする学習活動等により、「授業はよくわかる」「話をよく聞き発表している」と答える児童の割合は高い。

○家庭での読書習慣には、依然として大きな課題がある。

○自己有用感、自尊感情を高める取組の成果もあり、アンケートで「自分のことが好き」と肯定的に回答した児童の割合は高くなってきているが、一方で、不登校傾向の児童の存在が課題となっている。

○コロナ禍で外遊びの機会が減って以降、体力の低下が見られる。体力の維持、向上をいかに行うかが課題である。

○保護者は学校に対して好意的・協力的ではあるが、複雑な家庭環境や価値観の多様化傾向が、年々強く見られる。

○「米づくり」の全校児童による体験活動への協力、「桃の郷構想」、安全サポートなど、地域の協力・支援が大きい。

本年度の改善方策

○縦割り活動や異学年交流、地域・保護者との協働学習が行えるよう少人数を生かした取り組み方法を教職員とともに考える。また、教育相談（おしゃべりタイム）の活用等を通してありのままの自分が認められているという実感を持たせ、自己有用感を高める。

○活動の場面において、「子どもたちにどういった力が身についたか」という学習の成果を明らかにし、教職員が指導の改善に生かす。

○共通理解のもと随所に「体づくり運動」を取り入れたり、委員会が中心となって外遊びの機会を増やしたりすることで体力の向上に努める。

○教職員間で全ての児童の状況を共有し、子ども理解を深めるとともに、全校児童を全教職員で見えていくという意識のもと、組織的な対応を行うことで、安心・安全な学校生活を保障する。

○郷土の教育資源を活かして、「人・もの・こと」との出会いや体験活動を取り入れた学習の充実、カリキュラムマネジメントの確立により、社会の一員としての自覚を養う。また学びを実生活に活かすことで、課題解決能力を育む。

○学校運営協議会を活用し、主体的な学校運営への参画を通して、子どもたちを地域で育む教育活動を推進する。

○活気あふれた職員集団であるために、時間外労働時間の縮減を中心とした働き方改革の推進に努める。

4 重点的な取組事項						
番号	内容	実 施 期 間				
		4	5	6	7	8
1	自ら学び考え表現する力と確かな学力を育成する。	◎	◎			
2	心身ともにたくましい子どもを育成する。	◎	◎			
3	学校の組織力の向上と保護者・地域との連携を進める。	◎	◎			

5 令和6年度の重点目標

重点的な取組事項－1		自ら学び考え表現する力、確かな学力を育成する授業改善
A 今年度の成果目標		
「授業はよくわかる」「すすんで学習に取り組んでいる」と答える児童が85%をめざす。		
B 目標実現に向けた取組		
具体的な方策		
①	「めあて」「ふり返し」を明確にし、児童が「見通し」をもち、主体的に学ぶことができる授業づくりを行う。理解に時間がかかる児童への手立てを工夫する等、個に応じた支援を行うことで、基礎学力の定着を図る。	
②	ICTの効果的な活用方法、主体的に学習に取り組む児童の育成に向けた研修を行い、授業改善に努める。	
③	家庭の協力を得ながら、「こつこつ週間」の取組をもとに、家庭（自主）学習の習慣化を図る。読書環境（時間）の整備、家庭への啓発を行い、読書活動を充実させる。	

重点的な取組事項－2		たくましい心と体づくり
A 今年度の成果目標		
「自分には良いところがある」と思える児童が85%以上をめざす。		
B 目標実現に向けた取組		
具体的な方策		
①	子どもたち同士や地域の方々など、多様な人との交流学習や体験活動を効果的に取り入れることで、互いが理解し認め合える関係づくりを行う。	
②	児童一人ひとりの姿を注意深く見守り、その子らしさや個性を受け止め言語化し価値づけすることで、自己有用感や幸福感を高める	
③	教育相談（おしゃべりタイム）等を活用し児童理解に努めるとともに、保護者との懇談・スクールカウンセラーや関係機関との連携に積極的に取り組み、学校が児童にとって、安心・安全な居場所となるように努める。	

重点的な取組事項－３		保護者・地域、中学校と連携した「共育」「郷育」
A 今年度の成果目標		
「学校は、保護者・地域と共に子どもを育てようとしている」・・・あてはまる９０％		
B 目標実現に向けた取組		
具体的な方策		
①	保護者・地域に集会、行事等への参加を呼びかけるとともに、学年・学校だよりやホームページによる発信に取り組む。	
②	保護者・地域との「報告・連絡・相談」を大切にする。「人・もの・こと」と出会う活動や探究的な活動、地域・保護者との協働活動を計画的に学習に取り入れる。	
③	生活科や総合的な学習の時間を活用し、郷土愛を育む教育活動を地域と共に計画的に行う。	

6 学校における働き方改革の推進に向けた取組

上限時間に基づく目標		
成果指標①	1人当たりの月平均時間外労働	30 時間以下（30 時間以下の範囲）
	年 360 時間を超える時間外労働者数	0 人（変更不可）
	月 45 時間を超える時間外労働者の延べ人数	0 人（変更不可）
具体的な方策	○働きやすい職場環境づくりに努める。 ○タイムカードによる在校時間の把握の徹底により、個々の意識改革を図る。 ○遅くとも 18 時 30 分には退校するよう互いに声かけをしながら業務を進める。	
休暇取得促進の目標		
成果指標②	1人当たりの年間休暇取得日数	10 日以上（各学校で設定）
具体的な方策	○学校閉校日を夏季休業中に 4 日間、冬期休業中に 3 日間設定する。 ○休暇取得に対する個々の意識を高めると共に、休暇の取りやすい職場環境づくりを進める。	
学校独自の取組		
活動指標	設定した日の定時に退校できた職員の割合	80%以上
	予定通り休養日を実施できた部活動の割合	
	放課後に開催して 60 分以内に終了した会議の割合	40%以上
具体的な方策	○定時退校日を月に全体として 2 日以上設定する。 ○スクールサポートスタッフを効果的に活用する。 ○会議資料の事前配付・ペーパーレス化を進める。	